

アクセスできないものを指す：直示の相互行為的達成

Referring to something inaccessible: Interactional achievement by use of proximal special deictic expressions

梅村弥生, 伝康晴

Yayoi Umemura, Yasuharu Den

千葉大学大学院生, 千葉大学

Chiba University, Chiba University

gyyumemura@gmail.com

概要

本研究が注目している現象は、対象を知覚的にアクセスできない状況のもとで、それでも「共同注意」が達成され、活動が展開する事例である。こうした状況下での指示詞の使用は、指示詞が何を指しているかといった従来の距離に依存した指示詞理解では十分捉えきれない。本研究の目的は、指示詞を利用した発話に加えて、ジェスチャー、視線をも取り込みながら、指示詞による参照の理解が参加者の間の相互行為として、どのように成立するかを示すことである。

指示詞 共同注意 相互行為

1. はじめに

坂原 (2000 : 229) は、指示詞¹について「話し手だけでなく聞き手も、視覚や聴覚で直接的に指示対象にアクセスできることを前提とする。つまり、感覚的に共有された発話状況が前提になっている」と述べ、そのような前提条件は当たり前すぎてむしろ気付きにくいと指摘する。しかし、我々が日々暮らす現実の世界には、様々な状況がある。指示の対象を直接指し示せない状況や、指示者や聞き手が対象物を見て確認できない状況であっても、何ら支障なくそのような対象を指し示し指示行為を達成している。

データを提示する前に、本研究に関連のある先行研究を紹介する。

1.1 実験による指示詞選択の研究

従来、指示詞選択は対象への距離 (proximal/distal) に依存すると信じられてきたが、実際にはそうした掟が破られている事例が散見している。そこで、Coventry ら (2014) は、7つの実験を通して、「所有性」、「視認性」、「馴染み深さ」や「位置記憶」の程度が高いほど“this”を選択する傾向が強いことを見出し、単なる距離だけではなく、心理的近接性が this/that の選択に関与していることを実証した (Coventry et al., 2014)。

一方、日本語指示詞についても、明地らが「可視性」と「到達可能性」(手の位置)の観点から実験を行っており、近い距離でも「不可視物」や手が届かない物に対しては「これ」が使われにくいことを実証した (明地ら, 2013)。こうした実験は、指示詞選択が単に距離の反映ではないことを示すとともに、同じ対象物に対しても、状況に応じて、我々は指示詞を使い分けていることを提示した点で意義深い。本研究では対象そのものが不可視であることから代替物を対象とする点で、こうした実験結果とは関連深い。

1.2 日本語指示詞研究

日本語指示詞 (コソアド) を語彙として体系化したのは佐久間 (1936) であるが、以来多くの研究が積み重ねられてきたものの、一貫してコ系は「近」、ア系は「遠」というように、対象の空間的距離に依存することに変わりはない。そうしたなか、話し手や聞き手の認知の観点から指示詞選択を説明する理論として「情報の縄張り理論」(神尾, 1990) が、また意味論的アプローチによる「談話管理理論」(金水・田窪, 1990) が登場した。前者は話し手と聞き手の情報の縄張りという視点から、指示詞をはじめ様々な言語表現を説明した。コ系は話し手の、またソ系は聞き手の、ア系は両者の縄張りから選択されるとした。しかし、情報の縄張りという概念は静的であり、実際の指し示しの場面での話者のジェスチャーや配置の変化や参加者らの知識状態の変化など、その都度変化する要因への対処ができないことは否めない。また、「談話管理理論」では、知覚世界の対象への指し示し (現場指示) と言語によって導入された対象への指し示し (文脈指示) とに分けた上で、これらを統一的に捉えるために、話者の知識を格納する心的領域を仮定した。この点でも、「縄張り理論」同様に抽象的であり、心的領域における「聞き手領域」の境界が曖昧である。



fig.1.



fig.2



fig.3

Aは2回頷いた後に、L3でビールジョッキに手を伸ばしかけるが、途中でBの顔に何かが付着していることに気付く(fig.1)。その手をそのまま伸ばすが、伸ばしかけた手を戻して、L4で自分の口に手を当てる(fig.2, fig.3)。ここまでの間に、Aのためらいが見て取れる。相手の顔に付着した物を直接指摘できるのは、かなり親密な関係でないといけない。かと言って、放っておくわけにもいかない。ここで重要なのは、Aの紳士的な行動ではなく、Aの伝え方である。AはBの顔を指差すことも触ることもせず、代わりに自分の身体を差し出した。この時、指示の対象であるBの顔の付着物は、Aの顔の中に組織され「鏡像身体」としてBの代わりになる(西阪, 2008; 206)。Aは自分の顔をBの顔の代替として差し出し、そこには無い付着物に向かって自分で指差しをして、位置を同定したのだ。さらに、興味深いことは、Aの指摘からBの拭き取りまでの間、一貫してBはAを見ないのである。Bは周辺視野で、Aの動きをモニターしたのだろう。Bは、L4の「ちよっとごめん」を聞いたときに、自分の手を口に持ち始めていた。「ごめん」はトラブル発生の予告であり、Aの身体がBに向いていることも手伝って、Aを見ずとも問題が発生したことに気づいたのだろう。このことから、Bが対象物を見ないにも関わらず、両者の間に「共同注意」が成立したと言える。また、Aは「ついてるよ」の末尾の「よ」によって、Aの付着物へのアクセスの優位性を主張し(Hayano, 2011)ている。一方、Bはそれが単なる報告ではなく、ある種の指令であると理解し(高梨, 2019; 201), 速やかに拭き取ったと言えないだろうか。

つまり、指示詞を用いた指示は、参与者らによる指差しやそれを取り巻くさまざまな要因と一緒にあって、単なる指示ではなく指令という活動に展開していることがわかる。

2.2 【断片2 浴衣】

浴衣の着方を教授している場面である、この断片の前で、既に腰ひもを結び、おはしよりの調整や襟合わせが済んだ段階で、今度は胸紐を結ぶ段階に入っていく。尚、Sはこの時始めて浴衣を自分で着る。

01 S: +で 中心線を右に合+わせ:
Sgaze >>Tbody-----+Sbody+
Sbody >>紐を回わす----->>

02 S: +あ#そっか
Sgaze +Tbody->L.04
Sbody
03→s: 先生はこれを掴んでんのか
fig #fig1
04→T: =うんここを掴んで: (0.3)#+そして:
Sgaze ->+Sbody->L.09
fig #fig2
05→s: +°ほんとは°ここを掴んでるんですね
06 T: =うん
07 S: はい
08 (0.4)
09 T: +そして
Sgaze ->+Tbody-->>



fig.1.



fig.2

SはL01で、紐の中心(中心線と誤っている)を身体の右側に持っていき、そこから胸紐を身体に巻く準備をしている。Tは、右脇部分で浴衣をギャザーのように掴んで、紐の下に入れ込みつつ結ぶように指導している。しかし、脇を掴む理由がわかっていないSは、紐を身体に当てたものの、浴衣のどの部分を掴んでいいものかわからない。L1でSは紐を回しながらTの右脇を覗き込んでいる(fig1)。その結果、L3で「先生はこれを掴んでんのか」と言う。Sの視線の先にはTの脇がある。しかし、人の脇を掴むわけにはいかないため、自分の脇を掴んで「これ」を指し示し、発話では「先生」をエージェントにしている。明らかに、指し示しているのは「先生」の脇にも関わらず、代わりに自分の脇を掴んでいる。L02の「あそっか」の「あ」は、認識をマークする「あ」であり(Heritage, 1984), また、L03の「掴んでんのか」も、位置の事実に志向している。視線の先はTの脇だが、自身の脇を掴んで参照した上での理解を示している。Tも、L04で「ここを掴んで」と同じフォーマットで応答し、Sの理解が正しいことを示す。Sは、同じフォーマットで応答し「ほんとは」で始めることで、当初よく見えずに理解に困ったことを示している(L5)。L5でも、同じく「ここ」を使っているが、自身の身体を見ながら紐を巻いている。このときの「ここ」は自分の脇に他ならない。

つまり、L03の「これ」とL05の「ここ」は指している脇が異なり、別のものをコ系で示していることになる。このように、コ系指示詞の利用は、その都度、状況によって、柔軟に対象を変えていることがわかる。従来の、指示詞選択を距離概念に依存する方法の限界が、ここにも観察できる。

この事例でも、断片1と同様に共同注意の対象に問題がある。しかし、それにも関わらずSは理解し、Tもそのことを確認して次のステップに進むことを志向する。

3. 考察

2つの断片では、対象の可視性という点で、3項が揃わない状況での「共同注意」が成立している。ここでは、成立の理由と、それにも関わらずコ系が使用されている点に関して考察する。

まず、断片1で、BはAの鏡像身体を正面から見てはいないが、周辺視野で知覚した際に、それが自分の顔の代替であること、自分の顔をなぞらえてそこに在ることを知っている。断片2の場合では、Tの脇の代替として、Sは自分の脇を掴んでいる。両者とも自分がさわっているものが代替であることを知っている。すなわち、共同注意の対象が2つあるということで説明はできないだろうか。つまり、下の図1で示すように、対象の代替として、今自分が見ているもの、さわっているものがあり、一方で本来の対象がある。OAとOBは、話し手にも聞き手にも、それらがリンクされていることが分っているのである。客観的には、AとBの顔や、SとTの脇は別の実体である。しかし、「付着物を取り除く」或いは「胸紐を結ぶ」活動のなかでは、参与者らは、それらを同じものとして取り扱い、その結果、行為が進行するのである。

また、どちらもコ系指示詞が用いられている点に関しては、AもSも代理の身体として、自分の身体を差し出しているために、コ系指示詞を選択することになる。

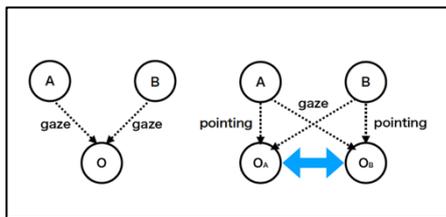


図1⁴

注

- 1) 本稿における指示詞とは、全て直示 (deixis) を意味する。いわゆる現場指示ともいえる、発話場面のコンテキストを参照することによって、物や現象の特定ができる。
- 2) Tomasello (2019) によると、共同注意とは、乳児の発達過程に発現する能力のひとつで、それまでの人との関わりから発展して、他者と一緒に物と三項的に関わり始めることである。これは、他者を世界に対する目標と知覚をもつ意図的主体として理解することであり、生後9ヶ月ごろから始まる発達的一段階である (Tomasello, 2019: 13)。この用語は、発達心理学で用いられる一方、一般に、人が他者と一緒に、特定の対象を視覚的に捉えるとき、人、人、物との三項関係が凝結されているとし、「共同注意が確立している」といった表現が使われる。
- 3) CEJC とは、国立国語研究所が構築した「日本語日常会話コーパス」(Corpus of Everyday Japanese

Conversation, CEJC) のことである (小磯ら. 2023)
4) 図1は、立命館大学 岡本雅史教授の協力によって描かれたものである。

文献

- 明地洋典・安田哲也・小林春美 (2013). 「指示詞使用における可視性と到達可能性の影響」日本心理学会第77大会 発表予稿集 p.696.
- Coventry, K. R., Griffiths, D., & Hamilton, C. J. (2014). Spatial demonstratives and perceptual space: Describing and remembering object location. *Cognitive Psychology* 69, 46-70.
- Diessel, H. (2006) Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics* 17: 463-489.
- Enfield, N. J. (2003). Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis. *Language* 79, 82-117.
- Hayano, K. (2011). Claiming epistemic primacy: yo-marked assessments in Japanese. In Tanya Stivers・Lorenza Mondada・Jakob Steensig (eds.) *The Morality of Knowledge in Conversation*. Cambridge (UK): Cambridge University Press
- 林誠 (2008). 「会話における『指示』と発話の文構造」児玉一宏・小川哲春 (編) 『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』 pp.603-619. ひつじ書房
- Hindmash, J & Heath, C. (2000). Embodied reference: A study of deixis in workplace interaction. *Journal of Pragmatics* 32. 1855-1878.
- 平田末季 (2016). コ系の意味の再分析—指示体系における新たな最小の意味的対立— 『国立国語研究所論集 10』 19-39
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023) 「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」 『国立国語研究所論集』 24, pp. 153-168,
- 神尾昭雄 (1990). 『情報の縄張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店
- 金水敏・田窪行則 (1990). 「談話管理論からみた日本語の指示詞」 『認知科学の発展 3』 85-115
- Levinson, S. C. (2004). Deixis. In: L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 97-121. Oxford: Blackwell Publishing.
- 西阪仰 (2008). 『分散する身体—エスノメソドロジ—的相互行為分析の展開』 勁草書房
- Nishizaka, A. (2011). Touch without vision: Referential practice in a non-technological environment. *Journal of Pragmatics* 43. 504-520.
- Nishizaka, A. (2024). Experiencing space: Some use of Japanese proximal special deictic expression. *Journal of Pragmatics* 226. 34-50.
- 坂原茂 (2000). 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」, 坂原茂編 『認知言語学の発展』 213-249 ひつじ書房
- 佐久間鼎 (1936). 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣
- Tomasello, M. (2019). *Becoming human: A theory of Ontogeny*. Harvert University Press. (トマセロ, M. 大藪泰 (訳) (2023) 進化と文化と発達心理学: 人の認知と社会性の個体発生をさぐる 丸善出版)
- 高梨克也 (2019) 発散型ワークショップでの発言に伴う指差し—多重行為から見た活動への志向— 安井永子, 杉浦秀行, 高梨克也編 『指差しと相互行為』 191-211 ひつじ書房